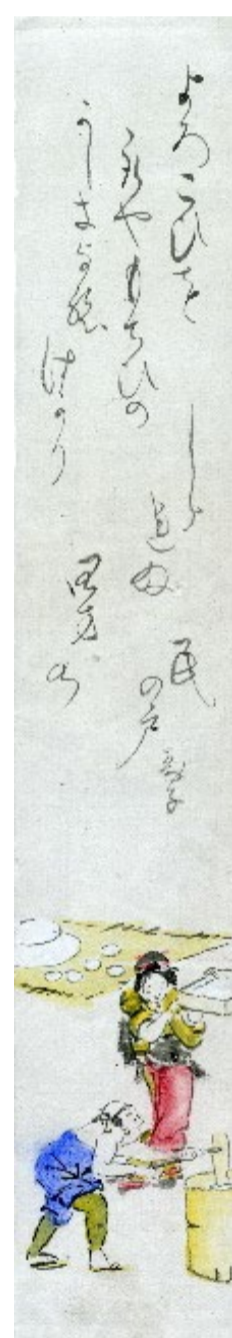
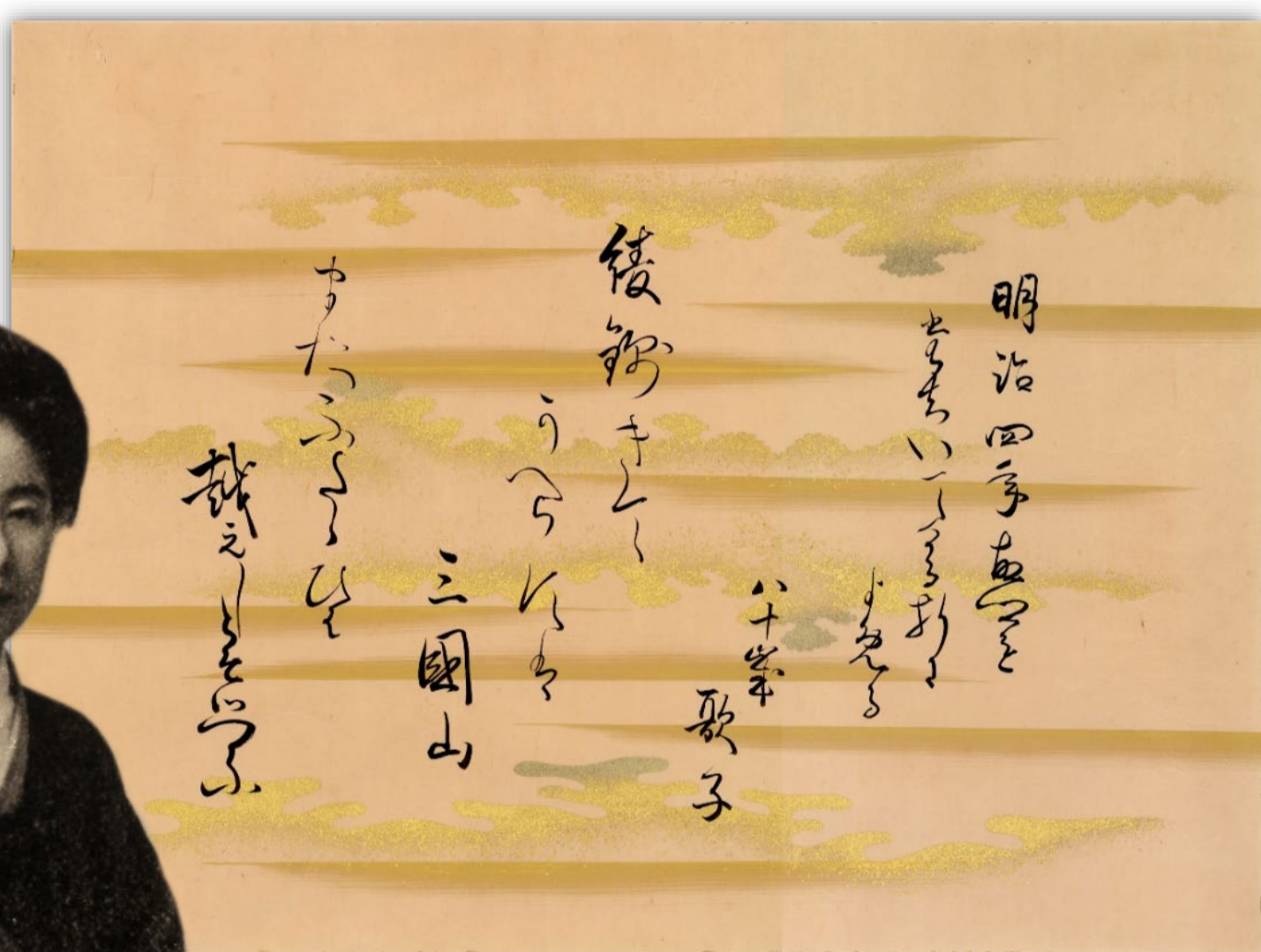


第20回 学祖・下田歌子展

生誕から宮中奉仕、 結婚、女子教育の道へ

2021年4月5日（月）－ 5月28日（金）

【事前予約制】・詳細は当館ホームページをご覧ください。
・学内の方は予約不要ですが、受付にてご記名いただきます。



開館時間 10：30～16：00
休館日 土・日曜日、
5/4（火・祝）
観覧料 無料
会場 実践女子大学香雪記念資料館
企画展示室1・2
主催 実践女子大学香雪記念資料館
後援 渋谷区教育委員会

実践女子大学香雪記念資料館

東京都渋谷区東1-1-49 実践女子大学キャンパス内
電話：03-6450-6805

HP：<http://jissen.ac.jp/kosetsu/>

ごあいさつ

学園創立者である下田歌子は、安政元年（1854）8月8日、美濃国岩村（現在の岐阜県恵那市岩村）に、岩村藩士・平尾録蔵（じゅうぞう）と妻・房（ふさ）の長女として生まれ、幼名を鉦（せき）といたしました。

平尾鋏蔵（しゅうぞう、他山とも）は、歌子の曾祖父にあたります。家族は、両親および、鋏蔵の三女・貞（さだ）と後に生まれた弟・錦蔵（ていぞう）の5人家族でした。父・録蔵は尊皇家であり、また謹厳実直で一途な性格のため、藩内の内紛に巻き込まれ、安政5年（1858）遠慮謹慎を命じられました。それは、歌子5歳の時でした。幽閉の父と乏しい収入をやりくりする母、そして不遇の平尾家において毅然と生きた祖母・貞の薫陶を受けて、歌子は成長しました。歌子は、幼い頃より神童のほまれが高く、和歌、漢詩の才能にも恵まれていました。

元治元年（1864）に謹慎が解かれた録蔵は、幕末維新の動乱期において、藩のため、朝廷帰順に奔走します。しかし慶応4年（1868）5月、理由不明のまま、再び隠居謹慎を命じられます。その時、歌子は多感な15歳の少女になっていました。その平尾家に大きな転機が訪れます。父・録蔵が、明治3年（1870）明治政府より神祇官の宣教使史生として召し出され、東京に出府したのです。翌年、歌子は父を追って単身上京し、故あって離別した祖父・東條琴台にも教えを受けることとなります。また、和歌を、加藤千浪、八田知紀に学び、後には八田知紀の高弟・高崎正風の教えを受けます。これらのことが、やがて歌子の宮中への道を開かせることとなります。

今回は、下田歌子の生誕から宮中奉仕、下田猛雄との結婚、桃天学校設立までを、歌子の人格形成に欠くことのできない家族、特に幕末維新という時代に翻弄される父・録蔵、祖父・東條琴台、夫・下田猛雄と、女子教育の道を歩むきっかけとなった桃天学校関係の資料を展示します。

令和3年4月

実践女子大学香雪記念資料館

1. 下田歌子の家族

歌子の曾祖父・平尾鋏蔵（1767-1840）や、のちに女子教育者として活躍する歌子の人格形成に大きな影響を与えた祖父・東條琴台（1795-1878）、祖母・平尾貞、そして、幕末維新という時代に翻弄されながらも懸命に生きた父・録蔵（1818-1898）に関する資料をご紹介します。

1-1. 歌子の曾祖父・平尾鋏蔵

平尾鋏蔵（しゅうぞう、明和4年〈1767〉-天保11年〈1840〉）は、信順または他山、括囊と号しました。

平尾家初代・岩村平尾氏友仙から数えて4代目で、岩村藩五〇石、郡奉行を務めています。学識が高く、儒学者である林述斎（1768-1841）や大田錦城（1765-1825）などとも交流しました。

1 平尾氏頌徳碑拓本 〈2892〉 平尾録蔵稿 万延元年（1860） 紙本墨摺 1幅 13.4×70.6cm

この顕彰碑は、大正8年（1919）平尾家の門人等により、岐阜県恵那市岩村の乗政寺山（じょうせいじさん）墓地にある平尾家墓所に建立されました。平尾氏祖先より、歌子の曾祖父・平尾他山、祖父・東條琴台を経て、鉦（せき＝歌子）、錦蔵（歌子の弟）の出生に至ります。

- 2 平尾他山肖像 〈2626〉 初代歌川豊国筆 平尾他山賛
 文化13年(1816) 絹本着色 1幅 64.4×27.5cm
 (初代歌川豊国) 署名「一陽齋豊國畫」 印章「弑陽齋歌豊之印」朱文方印
 (平尾他山) 賛「幸生海内凱安時 清世豈何歌式□ 看破詩書明不是 終起四十九年
 □ 丙子元日試筆年平時年五十 他山 平尾順」
 印章「他山」朱文方印 「平尾順印」白文方印
 関防印「雪中金」白文長方印

正装で端座する平尾他山の姿が描かれ、上部には文化13年(1816)他山50歳の元旦試筆である七言絶句が添えられています。初代歌川豊国(1769-1825)は、寛政期(1789-1801)から文化文政期(1804-30)を中心に、役者絵や美人画を多く描いた浮世絵師です。本図は肉筆によるもので、表情は役者絵風に描かれ、着物の模様なども精緻に表されています。

- 3 印章 平尾鋏蔵・平尾録蔵・下田猛雄 〈2940〉
 18世紀後半～20世紀初期 瑪瑙、木材など 13顆

本学には、下田歌子の曾祖父・平尾鋏蔵、父・平尾録蔵、夫・下田猛雄が使用していた印章が伝来しています。鋏蔵は儒学者らと交友があり、漢詩などにも優れていたため、印章も11顆と最も多く残されています。

1-2. 歌子の祖父・東條琴台

東條琴台(寛政7年〈1795〉-明治11年〈1878〉)は、名は孝蔵、信耕、文左衛門。琴台と号しました。歌子の曾祖父・平尾鋏蔵(他山)の三女である貞(さだ)の婿として迎えられ、嫡男・録蔵をもうけました。しかし、岩村藩内における学流の主流・程朱学派と合わず、結婚後2年で貞と離縁し、江戸に出ました。

琴台は進歩的な学者で、海防の必要を説いた『伊豆七島図考』等の著述が幕府の忌避に触れ、越後国(現新潟県)高田藩榊原氏の庇護の下、明治維新まで18年間謫居生活を送ります。維新後、東京に戻り、明治政府の宣教博士となり、後に亀戸天満宮の祠官を務めました。

- 4 奉願覚[復太郎儀嫡孫承祖願] 〈1780〉 平尾鋏蔵(他山) 味岡奎之允、味岡次郎左衛門宛
 文政6年(1823)7月5日 紙本墨書 1通 31.4×38.0cm

平尾鋏蔵(他山)が、三女・貞と娘婿である孝蔵(のちの東條琴台)との離縁のため、孫・復太郎(のちの録蔵)に家督を譲る旨を岩村藩に提出した願書の写しです。

- 5 平尾貞書跡 〈2629〉
 慶応3年(1867)72歳 消息 / 明治9年(1876)81歳 消息 /
 明治12年(1879)83歳 和歌2首 / 明治16年(1883)87歳 和歌1首
 紙本墨書 1幅(4種貼り交ぜ) 108.4×44.8cm

貞は歌子の祖母で、東條琴台の別れた妻です。歌子の幼年期には、祖母に厳しく躰けられたという逸話が数多くあります。

- 6 東條琴台肖像 〈2622〉 鈴木鷺湖画賛
 [明治元年(1868)] 紙本着色 1幅 106.6×35.6cm
 署名「我古山人木雄」 印章「雄」白文楕円印 「鷺湖」朱文長方印
 「台□□□人我古」朱文変形印 遊印「我古」白文長方印

東條琴台の姿を簡略な筆致で描いており、その表情はユニークともいえます。鈴木鷺湖(がこ、1816-70)は下総金堀村(現千葉県船橋市金堀町)に生まれ、江戸後期の著名な絵師・谷文晁(1763-1840)らに師事しました。琴台と鷺湖は書画会などで交流していた可能性が指摘されています。

- 7 孝蔵持参書目等覚書 〈1753〉 平尾他山
 文政2年(1819) 紙本墨書 1冊 21.1×13.6cm

他山は、三女・貞の婿である孝蔵(のちの東條琴台)と心ならずも離別した際、その蔵書を送り返しましたが、その一部は復太郎(録蔵)のために残しました。この資料は、残された蔵書の覚え書です。

8 先哲叢談 後編 別置 121.3/Se74 東條琴台著

文政12年(1829) 紙本墨摺 浪華 群玉堂河内屋茂兵衛刊本 8巻4冊 25.2×17.6cm

『先哲叢談』とは、江戸時代初期から中期までの儒学者を対象とした漢文による伝記集です。正編は文化13年(1816)原念斎により著されました。念斎の没後、東條琴台が嫡男・原徳斎の許可を得て、後編・続編をまとめました。

9 増訂 伊豆七島全図 附無人島・相武房総海岸図 <5094> 東條琴台

天保13年(1842) 自序 木版絵地図 別冊(袋綴) 1冊 17.5×11.8cm 帙入
1舗 78.6×108.8cm 折畳25.2×17.7cm

海防のため、古来、遠流の地と定められた伊豆七島の詳細を解説したもの。図の作者は不明ですが端正に描写されており、天保13年(1842)に500部限定で私刊されました。

しかし、図の大半を占める考証は幕府の忌避に触れ、東條琴台は高田藩邸に幽閉されて、刊本は絶版となりました。

翌年に幽閉は解かれますが、越後高田への居住を命じられました。

10 東條琴台書簡 平尾信左衛門(録蔵)宛 <1759>

元治元年(1864) 紙本墨書 1綴 24.6×15.8cm

琴台の嫡男・信左衛門(録蔵)に、世情騒然たる江戸から岩村に書き送られた書簡です。離別した後も、家族への細やかな思いが感じられます。

1-3. 歌子の父・平尾録蔵

平尾録蔵(じゅうぞう、文政元年<1818>-明治31年<1898>)は、復太郎、のち信左衛門や信亨、陽斎と号しました。祖父の歙蔵(他山)より家督を嗣ぎましたが、岩村藩内で2度の謹慎を命じられ、その不本意な心情および状況を文書に書き留めています。録蔵は非常に筆まめで、漢詩文のほか、幕末維新の世情や日常生活などの日誌、書留などが数多く残されています。

父・東條琴台との文通や交流は、維新の動乱期を通じて絶えることはありませんでした。明治11年(1878)琴台が没した後、録蔵は病身のまま、娘・下田歌子の庇護の下、明治31年(1898)2月13日に81歳で没しました。また、妻・房も同38年(1905)6月2日に76歳で没しています。

11 知行五拾石宛行状 <2877> 松平乗美 平尾信左衛門(録蔵)宛

天保9年(1838)2月28日 紙本墨書 1通 25.4×46.0cm

主君である岩村藩第5代藩主・松平乗美(のりよし、1791-1845)より家臣・録蔵へ宛てられた、五〇石の領地を与える旨を記した文書です。

12 岩村藩朝廷帰順の書留 <1392~1394> 平尾信左衛門(録蔵)

慶応3年(1867)~同4年(1868) 紙本墨書 3冊 25.4×17.3cm

慶応3年(1867)の大政奉還の際、岩村藩第8代藩主・松平乗命(のりとし、1848-1905)は弱冠20歳の青年でした。藩論が二分される中、藩主のいる江戸詰家老は佐幕派の沢井市郎兵衛であり、国表と藩論が一致しなかったため、蔵はその書状のやり取りを逐一書き留めています。結局、明治維新に際して、岩村藩は佐幕から尊皇に転向し、藩の存続を保ちました。

13 御預け謹慎被仰付候二付覚書 <1433> 平尾録蔵

明治元年(1868)5月付記 紙本墨書 1通 15.0×55.4cm

録蔵は、明治維新に際して岩村藩の朝廷帰順に奔走しましたが、帰藩後、理由不明のままお預けの身となりました。この資料は、申し開きをしても通らなかつたいきさつを書き留めた覚え書です。最後に無念の思いで「呵、、、」と書かれています。

14 不埒二付隠居被仰付 <1435> 岩村藩議行局差出 平尾録蔵宛

明治2年(1869) 紙本墨書 1通 17.8×71.2cm

録蔵の前年の謹慎を受けて、岩村藩から録蔵に宛てた、「尾張名古屋での勤皇周旋が済んだ帰藩途中に、勝手に名古屋に立ち戻ったとは不埒である。その咎により隠居謹慎を申付ける」という旨の書状です。

15 辞令[宣教掛仰付] 平尾録蔵宛 <1439> 岩邑藩庁

明治3年(1870)6月 呼出状共 紙本墨書 1通 19.6×115.6cm

明治3年(1870)6月に明治政府が岩村藩庁を通じ、録蔵を宣教掛(神道の国教化を推進する役職)に任命する辞令です。この辞令をもって、録蔵は上京し、明治政府に出仕することとなりました。

- 16 [国許より家族呼寄せ度御願] <1441> 平尾録蔵 岩村縣廳宛
 明治3年(1870)12月 控 紙本墨書 1通 13.8×65.3cm
 明治4年(1871)8月 控 紙本墨書 1通 14.0×40.0cm
 録蔵が岩村県庁に宛てた、家族を東京へ呼び寄せることを願い出た文書です。明治4年(1871)には、まず当時16歳であった平尾せき(鉦、のちの歌子)が上京し、家族も続きました。

- 17 懐紙 綾錦着てかえらずば… <4655> 下田歌子80歳の時の書
 [昭和8年(1933)] 紙本墨書 1枚 35.9×48.0cm
 「明治四年故郷を たちいてける折に よめる 八十歳 歌子
 綾錦きて かへらすは 三國山 またふたゝひは 越えしとぞ思ふ」
 明治4年(1871)、当時16歳であった平尾鉦(のちの歌子)は、前年に明治政府に出仕した父を追い、学問の研鑽や宮中への出仕のために上京します。故郷を出て、美濃の国境であった岐阜県三国山を越えた際、鉦はこの和歌を詠みました。立派に成功するまでは絶対に故郷へは帰らない、という出立の強い決意が込められています。この懐紙は、歌子が80歳の時に当時を振り返って書いたものです。

- 18 東路之日記 『香雪叢書』第1巻「紀行随筆 よもぎむぐら」
 (実践女学校 昭和7年<1932>11月刊)所収 1冊 18.9×13.2cm 081.6/9/1
 歌子による、明治4年(1871)4月に岩村を出立してから、岡崎を経由し、箱根に至った道中の紀行文。父・録蔵が8歳の時より平尾家に仕えた高智文蔵と、その娘・鉄女も従者として付き従いました。

- 19 寄留替届 <1442> 平尾録蔵並家族一同
 明治5年(1872)5月 本所花町松平乗命邸内より本所三笠町へ
 同 6年(1873)9月 本所南二葉町より本所柳原一丁目へ
 同 6年(1873)9月 全戸寄留送 岩村戸長 控3通
 紙本墨書 1綴(3枚) 別紙1枚 27.6×39.7cm
 平尾家の上京後の引越しの様子が、この控えによりわかります。「松平乗命邸」とは、旧岩村藩邸のことと思われます。その後、明治8年(1875)5月本所小泉町、6月本所相生町、12月には麴町区永田町高崎正風邸内に移住しています。

2. 下田歌子の宮中出仕

上京の翌年である明治5年(1872)10月、平尾鉦(せき)は、歌人・八田知紀(1799-1873)の高弟である高崎正風(1836-1912)、元田永孚(ながざね、1818-91)らの推挙によって宮中に出仕し、皇后(のちの昭憲皇太后)に仕えます。鉦はその優れた和歌の才能を愛でられ、皇后より「歌子」の名を賜りました。以後、終生にわたり、歌子の名を名乗ることとなります。

また、明治8年(1875)に皇后が高等師範学校に行啓された際には供奉を許され、学事に関する講筵の陪席を許されるようになりました。毎年のように昇進し、明治12年(1879)には官職の一つである権命婦に任じられ、歌人で女官の税所敦子(1825-1900)や、のちの大正天皇の生母である柳原愛子(1859-1943)とも親しく交わりました。

- 20 御用二付御呼出 <2878> 宮内省 平尾録蔵宛
 明治5年(1872)10月22日 紙本墨書 1通 19.4×39.8cm
 宮内省から録蔵に宛てられた、同省への出仕を命じる書状です。鉦(歌子)は上京の翌年、録蔵と親交のあった歌人の高崎正風、儒学者の元田永孚らの推挙によって宮中に出仕します。

- 21 辞令十五等出仕 <2219> 宮内省 平尾鉦宛
 明治5年(1872)10月23日 紙本墨書 1通 21.6×28.8cm
 宮内省から平尾鉦(歌子)に宛てられた宮中奉仕の辞令です。以後、鉦は女官として活躍していくこととなります。

22 平尾録蔵書簡 平尾せき子宛 〈596〉

[明治6年(1873)] 10月11日 紙本墨書 1通 15.5×41.3cm

父・録蔵から娘・せき子(鉦、歌子)に宛てられた、身辺雑用の申し送り事項や、せき子の夫・下田猛雄との連絡取次などについて記された書状です。

23 陽斎詩文稿 稿本 〈1173,1174〉 平尾録蔵著 下田歌子校訂

明治21年(1888) 自序・元田永孚序 版下稿本 上・下 2冊 23.2×16.2cm

録蔵の漢詩文がまとめられたものです。本書の「陽斎」は録蔵の号です。明治維新後、録蔵は下谷警察署で漢学を講じ、弟子もいました。

24 下田歌子絵姿 〈2636〉 樵靄(生没年不詳)筆

[明治20年(1887)頃] 絹本着色 1幅 100.5×69.5cm

画中の歌子が持つ菊花が描かれた檜扇には、「小蘋女史親」とあります。女性南画家の野口小蘋(1847-1917)は、官命で、昭憲皇太后の御寝間に花卉図八葉を描き、宮家の御用掛を仰せつかるなど宮中との関係は深く、後に華族女学校の教師も勤めています。筆者の樵靄については明らかになっていません。

*参考作品 平安長春図 野口小蘋筆

大正3年(1914)頃 絹本着色 1幅 108.5×36.6cm 実践女子大学香雪記念資料館蔵

25 書幅 春月 〈2458〉 [明治5年(1872)] 絹本墨書 1幅 34.7×52.8cm

「たまくらは 花のふゝきにうつもれて うたゝ寝寒しはるのよの月」

「春月」という題に対し、鉦が皇后(昭憲皇太后)に詠進した一首。鉦はかねてからその歌才を愛でられ、皇后から「うた」の名を賜りました。『香雪叢書』第2巻「歌集 雪の下草」に、宮中奉仕時代の作として、「勅題 春月〈大宮の 玉のうてなに のほりても なほおぼろなり 春の夜の月〉」とともに収められています。

26 短冊 冬河 〈802〉 文久2年(1862) 紙本墨書 1枚 35.1×6.2cm

「見渡せは 寒さそまさる 大井川 氷の上に つもるしらゆき」

鉦(歌子)9歳の時の自筆による短冊であるといわれています。

27 短冊 よろこびを… 〈1711〉 青年期 [宮中奉仕時代] 紙本墨書淡彩 1枚 36.4×6.0cm

「よろこびを取や もちひのかしきより はかりしられぬ 四方の民の戸 歌子」

散らし書きによる自筆の和歌に、餅を作る男女の淡彩画が添えられています。

28 短冊 春草 〈796〉 壮老期 画も下田歌子自筆 紙本墨書 1枚 36.3×6.0cm

「黒土を もたくる草に 新らしき ちからも見えて 春はうれしも」

29 短冊 寄井述懐 〈987〉 壮老期 紙本墨書 1枚 36.4×6.0cm

「塵ひちの かゝらはかゝれ 山のみの そこのこゝろの にこりやはする 歌子」

30 短冊 杖となる野辺の小松に 〈991〉 昭和5年(1930) 紙本墨書 1枚 36.7×6.0cm

「杖となる 野辺のこまつに 引かれつゝ おい木も千世の 春や重ねむ 七十七歳歌子」

喜寿に歌子が自ら詠んだ歌。和紙を短冊状に切り、この和歌を書いて喜寿記念として生徒に配ったといわれています。

31 皇居炎上後の控 〈35〉

明治6年(1873)5月 紙本墨書 1綴 12.5×17.4cm

歌子が宮中出仕した翌年、宮中にて火災が起きました。その際の様子を記録したものです。

32 [楓のもとを離れて] 〈256〉

[明治9年(1876)] 紙本墨書 2綴 14.0×20.5cm

楓(楓掌侍)とは歌人で女官の税所敦子(1825-1900)のことです。公卿の子女が多い宮中において、歌子と敦子は武家出身者として深い親交を結びます。この資料は、皇后のお付きとして箱根に行く敦子との別れを惜しんだ歌子による随筆の草稿です。『香雪叢書』第1巻「紀行随筆 よもぎむぐら」に収められています。

3. 夫・下田猛雄

下田猛雄（嘉永元年〈1848〉－明治17年〈1884〉）は讃岐国（現在の香川県）丸亀藩の藩士でした。剣術家として諸国を武者修行し、岩村藩にも立ち寄った記録が残っています。

明治12年（1879）11月、宮中より下った平尾鉦（せき子、のちの下田歌子）と結婚しましたが、時代の流れに乗りきれず、失意のうちに明治17年（1884）5月、36歳で病没しました。

33 剣法神秘奥義 〈639〉 島村勇雄免許奥書 形目録他別伝 1通

明治3年（1870） 紙本墨書 1巻 17.2×186.2cm

島村勇雄（文政期〈1818－30〉－1879）は旧大垣藩士で、剣術の一派である田宮流の師範。下田猛雄に剣術を指南した人物です。江戸に出て道場を開き、安政5年（1858）10月に江戸の山内家で開催された撃剣大会においても、齋藤弥九郎（1798－1871）、桃井春蔵（1825－85）など一流の剣術家と並び師範役に名を連ねています。この免状は「奥伝」といい、初伝から8年の修行を経て伝授された免許状です。

34 剣道試合人名帳 〈645〉 下田猛雄筆

万延2年（1861）～明治4年（1871） 紙本墨書 横綴1冊 12.8×19.5cm

各地を武者修行してまわった折の記録です。明治3年（1870）10月、下田歌子の故郷・岩村藩を立ち寄った際的一条もあります。

35 寄留願 〈597〉 下田猛雄 東京府知事宛

明治9年（1876）3月写 紙本墨書 1綴 24.3×16.2cm

36 下田猛雄書簡 平尾せき子宛 〈444〉

[明治6年（1873）] 10月31日 紙本墨書 1通 15.2×53.2cm

この頃、猛雄は仙台で不慣れな事業を営んでいました。一人で仙台にいるという淋しさや、宮中のせき子（歌子）への思い、病にかかったせき子の弟・錦蔵への気遣いなどを書き送っています。

37 平尾せき子書簡 下田猛雄宛 〈24〉

[明治10年（1877）] 5月29日 紙本墨書 1通（1巻） 16.3×124.4cm

せき子（歌子）が宮中から猛雄に宛てた手紙です。この手紙の約2年半後、明治12年（1879）11月に二人は結婚しますが、なかなか結婚までには至らないさまざまな事情が記されています。

* 本展企画および主な解説は、実践女子大学香雪記念資料館専門委員会・大塚宏昌 元委員（実践女子大学図書館 元部長）が担当しました。

解説の一部と編集は実践女子大学香雪記念資料館 前学芸員・中村玲、編集補助は同臨時職員〔学芸補助〕・河本理緒が担当しました。

* 展示作品は記載のないものは全て実践女子大学図書館所蔵であり、〈 〉内番号は実践女子大学図書館『下田歌子関係資料総目録』（昭和55年〈1980〉）に対応しています。〔 〕内表記は、推定事項の場合です。

4. 桃夭学校設立

下田歌子は、結婚後の明治15年（1882）麴町区壺番町の自宅に、私塾であり実践女子学園の前身である「桃夭学校」を設立しました。

桃夭学校の設立は、当時、近代日本にふさわしい上流子女の教育が要望されたことや、病気の夫と家族をかかえ、家庭に埋もれていた歌子の才能を惜しんだ伊藤博文（1841－1909）、土方久元（1833－1918）など明治政府の高官たちに囑望されたことによるものといわれています。

- 38 下田学校開業上申書 〈876〉 下田歌子 東京府知事宛
明治15年（1882）3月 1通 学科・教科書・学期・授業料一覧表付
原本：東京都公文書館所蔵 写真6枚

下田歌子が東京府知事に宛てた、学校を設立するにあたっての上申書です。当初の学校名（下田学校）や、住所、学科、使用予定の教科書などさまざまな事柄が記されています。

- 39 下田学校名称改定届 〈877〉 下田歌子 東京府知事宛
明治15年（1882）6月 1通
原本：東京都公文書館所蔵 写真1枚

当初の学校名は「下田学校」と申請されましたが、のちに「桃夭学校」と名称改定を行いました。「桃夭」とは、『詩経』（周南篇）の「桃之夭夭 灼灼其華 之子于歸 宜其室家」からの一節で、年若い女性の淑徳を形容して名付けられました。

- 40 桃夭学校教則等改正儀伺 〈67〉 下田歌子 東京府知事宛
明治16年（1883）9月 伺書・細則・授業時数・学科・教科書等一覧 紙本墨書 1綴 28.1×18.5cm
桃夭学校と名称が改定された後、授業時数・学科・教科書等の改正も行われました。

- 41 桃夭学校地区別生徒名簿 〈929〉
[明治15年（1882）頃] 紙本墨書 半紙判3枚 24.4×17.0cm

桃夭学校が位置した麴町区をはじめ、さまざまな地区から学生が入学しました。

- 42 [桃夭学校] 出席表 〈68〉
明治18年（1885）8月11日より8月29日まで 紙本墨書 美濃判横折21枚 12.8×31.7cm
桃夭学校の学生たちの出席表です。

第20回 学祖・下田歌子展 生誕から宮中奉仕、結婚、女子教育の道へ 展覧会パンフレット

発行日：令和3年（2021）4月5日

令和3年（2021）4月12日 第2版

編集・印刷・発行：実践女子大学香雪記念資料館

〒150-8538 東京都渋谷区東1-1-49

TEL 03-6450-6805

HP <http://www.jissen.ac.jp/kosetsu/>